失われた愛を求めて（二）
――恋愛関係における南吉の〈闇〉――

北　吉　郎
（人文学部人間文化科学）
Kichiro KITA

一　はじめに

新美南吉は、〈孤独〉な童話作家であった。その〈孤独〉は凄絶であり、数少ない、親しい友人からさえもほとんど理解を得ていない。彼は、生涯を通して、〈孤独〉の〈闇〉を独りで抱え込んで生きている。それは、〈孤独地獄〉と呼んでもよい程の苦悩の〈闇〉であった。このことは、南吉研究者においても同様で、内奥の〈孤独〉の〈闇〉にまで十分論述を押し進めて、作品論を展開している著述は少ない。

南吉の〈孤独〉は、幼年時代に見舞われた〈母の喪失〉感と密接な関係がある。南吉は、継母と暮らし始めた「家」の中にあって、〈失われた母の愛〉を激しく求め続けた。そのために、〈他者との結びつき〉（＝「魂の流通共鳴」）の土台をなす信頼形成の心理において、少なからぬ「障害」を受けたものと思われる。〈他者との結びつき〉における、懐疑・絶望・挫折感の心理はそうした中で身についてしまったものと考える。そのことは、とりもなおさず、人間関係の現実世界を生きていく上で地獄の〈闇〉に陥れ、少年・青年時代を苦しめることになった。先に発表した拙稿「失われた愛を求めて（一）――南吉の〈闇〉――」では、そのことを、南吉自身の幼少年時代を描いたいくつかの作品の考察や、日記中の記述、および親しい友人の見た南吉像を通して論及した。

では、そうした南吉の〈孤独〉の〈闇〉は、現実生活の側面ではどのような形で顕れていたのか。そのことを本稿では、青年時代における〈他者との結びつき〉の一つの形態である恋愛関係を通すことによって、見てみたい。

南吉の短い生涯の中で、いわゆる〈恋人〉と呼べるような女性は三人いた。これらの女性との関係は、彼が書いた記述を読む限りでは、いずれの場合も最初は相思相愛の関係で進行している。にもかかわらず、恋愛が深まっていくに従い、そうして結婚のことが問題化してくる頃あたりから、それ以上に深入りすることを南吉は拒絶するようになる。それは、なぜなのか。どうして、恋愛が深まり結婚の方向へと進展していくことを南吉は拒絶するのだろうか。そのことの追求が、とりもなおさず南吉の〈孤独〉の〈闇〉に迫っていくことになると考えるのである。

（一）M子との恋愛

「M子」というのは、南吉が愛知県立半田中学校の生徒だった頃から、密かに恋心を育み、将来の結婚相手として空想していた、初恋の女性である。南吉は、半田中学校を卒業した年に、四月から代用教員として半田第二尋常小学校で教鞭をとる。M子とは、そのときの第一学期のときに交際が始まっている。南吉は、翌年に上京。東京外語学校の学生となる。しか

し、東京では恋人らしい女性はできておらず、学生時代の四年間ではM子のことが日記等の記述のほとんどを占めている。南吉にとっては、片思いから始まった、いわば生涯を通じての〈心の恋人〉であった、といっても過言ではない。

東京外語学校時代に南吉が書いた、巽聖歌宛の手紙に次のようなものがある。

私の恋人はなかなか私をあきらめてくれません。

――僕は世間一般の男と違ふ。肉体が虚弱である、精神が冷却してゐる。僕は結婚しても妻をあまりかへりみない。文学と孤独を愛するからだ。世間一般の夫は妻とゐて始めて気持ちが充実する。僕は一人でゐて充実してゐる。だから僕と結婚したらあなたは不幸だ。僕なんかよして、今よい縁談があるうちに他所へいってしまひなさい。

と僕は諄〻とさとす。だのに、

――あなたがもし或る女と結婚してその女を不幸にするなら、咸子がその不幸な女になりたい。

など、野暮をいふ。(以下省略――一九三四・七・二六　傍線引用者『校定新美南吉全集』⑫P.四三二)

「私の恋人」とは、M子のことである。東京外語の学生時代になると、M子との交際は中学校時代の片思いの頃から、飛躍的に進展している。この手紙の内容だと、M子はもはや、南吉に対してかなり心が傾斜しているように読める。ただ、南吉の書いたものは、必ずしもすべてを額面どおりに受け取ってよいとは限らない。期待や願望を込めた空想、文学的誇張や自分に都合のよい虚構性も含まれていることがあるからである。そうしたことも、一応斟酌する必要はある。

M子との間の進展が、どの程度のものであったかはともかくここで注目したいのは、M子に対して結婚を「あきらめ」させようとしている点である。そして、「あきらめ」させる理由として「肉体が虚弱である、精神が冷却してゐる。」等を挙げた上で、「僕と結婚したらあなたは不幸だ」としている点である。

南吉は、この頃は、まだ第一回目の喀血を経験していない。だが、結核死による夭折の予感については中学時代の頃からのことであるので、「肉体が虚弱」ということに関しては一定の理解ができる。しかし、「精神が冷却」についてはどうであろうか。「結婚しても妻をあまりかへりみない」、「文学と孤独を愛するから」というようなことは、作家を志している者ならばそれほど珍しいことではないようにも思える。従って、こちらの方は単なる言い訳であるように思えないではない。だが、そうだろうか。否、そうではあるまい。

というのは、既に「失われた愛を求めて(一)――南吉の〈闇〉――」の拙稿で綿密に考察したように、「精神が冷却」というとき、そこには「魂は芯まで冷えて」とか「温かい着物が脱落していく」などといった深刻な心理が付随していることに思い至るからである。〈他者との結びつき〉におけるそうした「寂しさ」の心理は、同論文の中で述べているように、作品中の少年たちや生身の南吉自身にとって存在自体を不安定にする、精神的な危機に陥らせるものであった。従って、ここで「精神が冷却」というとき、それは一般の文学青年にみられる内的世界とは異なった精神風景を考えてみた方がよいように思われる。つまり、幼少年期において〈他者との結びつき〉に少なからぬ障害を受けてきた者が引きずっている(南吉固有の)「孤独」感である。そして、その障害の淵源として関与しているのが、ほかならぬ〈失われた母の愛〉である。このことは、南吉が児童文学で成功を得、なかでも名作とされる作品が母子の愛を描き、また母を亡くした〈一人ぼっち〉の境遇の子ども(狐)が登場する作品であることを考えてみれば、納得できるところである。

次の問題点は、「僕と結婚したらあなたは不幸」であるとしている点である。M子の方は、自分が「その不幸な女になりたい」とまで言っているにもかかわらず、である。本当にM子がそんなことを言ったかどうかについては疑問の余地があるとしても、南吉と結婚することを「不幸」と断じる南吉自身のこの考えかたは、心底からの気持ちのようである。というのは、後で考察する他の二名の女性との恋愛の場合でも、共通の心理が述べられるからである。

この手紙を書いた翌年、春休みで帰省している時であろうか、日記中に次のような記述がある。

> 僕は例の、僕の心の複雑なことを根拠にしてなるべくはａａ（M子）が他家へいってくれた方がお互いのために幸福であるといつた。すると峯好君は急にまじめになつて、あなたは結婚してやる意志はないのかときつくきいた。そんな風に出られると僕はうっかりしたことは言へないと思つて、又例の僕の心の複雑だといふことに逆戻りしたりするのであつた。
>
> 僕はかうしたどつちつかずのあいまいなこんぐらがつた理くつをこねまわしてゐるとき、心の底ではたつた一つのこと、それが言へないために自分は理くつめいた愚痴をいつてゐるにすぎないと思つて非常に自分が情けなく又憐れに感ぜられた。
>
> （「メモ＆日記」一九三五年三月二五日　傍線・括弧内引用者　『校定新美南吉全集』⑪P．四一）

この記述を読むと、南吉は「峯好君」という人との間で、M子をめぐりどちらがM子と結婚すべきかを話し合っている。どうやらM子は、南吉の方に愛情を残しているが、南吉としては「峯好君」と結婚する方を望んでいる、という内容である。

この記述についても、どこまでが真実なのかは分からないが、結果的に見ればM子はその後「峯好君」と結婚している。従って、そのころM子と「峯好君」とが交際を深めており、そのままだと結婚へとつながっていく可能性が高かったことは事実なのであろう。そのために、南吉の強がりの心理が虚構性に満ちた文章を書かせていると考えられないでもない。しかし、他方の側面から南吉とM子の交際を――当初の段階から順を追って――考えてみると、南吉が結婚を強く申し込んでさえいれば、あるいはこの当時のM子はその申し入れを喜んで受け入れる態勢にあったのかもしれない。

だが、仮に南吉とM子との関係がそこまで深まっていたとしても、恐らく南吉は結婚を申し込むことはしていないだろう、と推測される。そうした結婚の申込みをせずして、それでいてM子を手放してしまいたくない心理から書かれた文章である、ようにも読める。というのは、他の二名の女性の場合でも後で考察するように、どうやら南吉の結婚願望は空想上のことであり、現実世界にあっては恋愛が深まっていくにつれて、むしろ自分の方から頑に防壁を築き、結婚へと進展していくことを俊拒するようになっていくからである。

そのことは、上記の日記の場合、「峯好君」に「あなたは結婚してやる意志はないのか」と「きつく」聞かれて、「そんな風に出られると僕はうつかりしたことは言へないと思つて」（傍線引用者）と書いてあるところに表れている。どうして、「うつかりしたことは言へない」のか。これまで永い間、彼女だけを一途に恋してきたはずである。結婚する意志があれば、（M子の方は、そう願っているのだとしたら）、はっきりそう言うべきである。ところが、南吉はそうは言わない。言えない。「心の複雑だといふことを」口実にするのみである。なぜだろうか。言うまでもなく、〈結婚に踏み込めない〉理由が存在するからである。その理由、とは何か。「たつた一つのこと」、それである。そのことが言えないから、心の底で苦悶している。

さて、ここで注目したい重要なことは、心の底の「たつた一つのこと」が言えないために、「非常に自分が情けなく又憐れに感ぜられた」と書いてある点である。それは、そうだろう。相手は、中学時代から一途に恋してきた女性である。それにしても、「たつた一つのこと」とは何であろうか。そのために、結婚に踏み込めず「非常に自分が情けなく又憐れに感ぜられ」るようなこと。実は、これこそが、南吉という生身の人間とその童話創作をつないでいる深奥の扉を開く鍵に他ならない。その深奥に、南吉という人間の存立を危うくもさせ、また同時に童話作家として成立させている、精神領域があるように思われるのである。だが、そのことが何であるかは具体的に記されていない。彼自身にとっては自明すぎることだからである。自明のことを改めて記して、「情けなく又憐れ」になる必要もない。この、「自分が情けなく又憐れに感ぜられた」に関しては、後に中山ちゑとの恋愛を考察していく際に、論及することになる。

「峯好君」とのやりとりの記述から、約二〇日程を経て書かれた日記が次の文章である。恐らく、東京へ戻ってからの記述であろう。

巽のところから帰つて来て机の前にすはると、例の寂しさがやつて来た。何者も自分を慰めはくれなかつた。虚無であつた。そのとき私は考へて見た。「aa（M子）と結婚したあとでもこんな寂しさが訪れて来るに違ひない。aaと相擁してゐても、こんな寂しさは忍び込んで来よう。その時は、私はどうすべきであらふか。」

（「メモ&日記」　一九三五・四・一六　傍線・括弧内引用者　『校定新美南吉』⑪P．七三）

最愛のM子と「結婚したあと」でも、「相擁してゐても」、訪れてくるに違いない「例の寂しさ」や「虚無」について書かれた文章である。そうした、何者も慰めてはくれない「寂しさ」が、しばしば襲ってきていたことについては、先に発表した拙稿「失われた愛を求めて（一）――南吉の〈闇〉――」の中で友人である河合との喫茶店でのことを取り上げて言及してきたところである。〈他者との結びつき〉の際に生じてくる、「温かい着物が脱落」し「魂は芯まで冷え」ていく孤独の心理は、到底他者に理解できることではなく、結局自分一人で背負って生きていかざるをえない。南吉は、空想の中で女性に恋をしても、現実世界では一緒に共同生活をするわけにいかないのである。そのことを、彼はM子との恋愛を通じてはっきりと思い知らされることになる。

こうしたことがあって、その後の記述であろう。M子へ宛てた、次のような書簡文の下書きが残っている。

手紙を頂きましてからこの方、暇なもんですから今までのことをゆつくり考へてみましたが、どうもあなたの仰有つことが皆嘘だつたやうな気がして来ました。

それから自分の方のことをよく考へて見るに、実は私の言つた言葉も大抵嘘でありました。

解りやすくいふと私達が今まで恋愛だなどと言つてゐたのは嘘だつたわけです。

ちやうど山のなかで狐と狸がばつたりあつた。狸は女学校を出たばかり、狐は中学校を出て代用教員なんて性に合はぬことをしてゐるところで、二人はお互いに退屈してゐたものだから、何かして遊びたくなつた。そこで狸と狐は恋人同士に化けて遊んで見たのであります。しかし、その嘘を言い合つてゐることが大変面白いのでつい止めることが出来ずに四年間も続いたわけです。考へて見れば随分長い嘘の恋愛です。

（〈無題〉「手紙を頂きましてから」　傍線引用者　『校定新美南吉全集』⑨P．六三一）

この文章は、M子との恋愛から訣別目的で書かれた手紙の下書きである。実際に浄書され、投函されたかどうかについては不明である。机上の空想として書きかけて、未投函のままで終わった可能性も高い。

南吉は、中学時代からのM子との恋愛を「嘘の恋愛」だったとすることで解決しようとしている。この言葉が、彼の真実の気持ちから程遠いことは当然過ぎるところである。しかし、相手側にすれば、このような手紙をもらうことでどれほど情けない気持ちにとらわれることだろう。その意味では、相手側が南吉から訣別する上で未練の気持ちを残すことのない、完璧なまでに冷酷な内容であるといえる。

それにしても、どうして南吉は、こうした「嘘」を作り上げてまで好きだった女性と訣別しなければならなかったのか。これまでの日記等の記述に偽りがないとすれば、破局の原因は、南吉の側にある。他者には言えない「たった一つのこと」を、彼が抱え込んで生きていたことにある。南吉の「嘘」については、友人である河合がその著書『友、新美南吉の思い出』の中で指摘し激しい嫌悪を示しているところである。だが、河合には（恐らく、M子や他の二名の女性も）、〈他者との結びつき〉における南吉のどうにもできない不可抗力として襲ってくる「寂しさ」の心理は理解できていない。本来ならば必要としない「嘘」で、〈他者とのつながり〉の辛さを逃れ、また誤魔化してしのいで生きていかざるをえない南吉の心に、〈闇〉の深さを見る。

やがて、M子は「峯好君」と結婚する。南吉は、東京外語学校を卒業後に雑貨貿易商に勤務するがその年の一一月一六日に第二回目の喀血があり、愛知県の実家へ帰ってくる。「昭和一二年ノート」の日記は、故郷へ帰ってきてから書かれている。その中に、次のような記事がある。

> あの女に対する面あてに、あの時かゝされた恥を雪がんために――何かしなければならぬ、そのためにあいつがあの男を選んだことを後悔するやうなことを。自分はいつもさう考へてゐる。しかし他方でこの考へは到底実現されるものでないことも知つてゐる。
>
> （「昭和一二年ノート」　傍線引用者　『校定新美南吉全集』⑪P．一〇六）

この文章は、嫉妬心をあからさまに露呈した内容になっている。言うまでもなく、強い未練心がその裏にある。

また、次のような日記の文章。

> その空想――僕は運よくいつて相当名の知れた翻訳家になつてゐる。（誰かにくすりと笑はれるやうで書くさへ恥ずかしい）女房ももう出来ている。気取らない、心持ちのさばさばした、利口な、気前のよい、仕事好きの、教育はそれ程沢山はない、百姓出の女である。容貌は十人なみ以上である。（中略――引用者注）僕等は現在の家に住んでゐて、ひどく民衆的な生活をしてゐる。（aaに対する面当てに。すべてこの空想はその裏にaaがひそんでゐるのである。）
>
> （「昭和一二年ノート」　傍線引用者　『校定新美南吉全集』⑪P．一六六）

「aa」とは、M子のことである。M子が結婚した後でも彼女のことを強く意識しており、未だに未練心が残っていることを物語っている。要するに、前述の手紙の下書きにあった「嘘の恋愛」などでは全然なかったことを意味している。

M子との恋愛では、彼女が「峯好君」と結婚することで南吉から離れていったという意味では、「失恋」ということになるだろうか。南吉は、M子との恋愛の中で、結婚に対して踏み込んでいけない経験を持つにいたった。そのために、その後の他の女性との交際では、恋愛が深まっていくことに対して強い警戒をするようになっていく。

(二) 山田梅子との恋愛

山田梅子という女性は、南吉が、第二回目の喀血のために東京の雑貨貿易商を辞めて帰郷し、翌年四月から地元の知多半島の河和第一尋常高等小学校で臨時教員をしていたときに知り合った、同僚の教員である。南吉は、この小学校で第一学期のあいだ勤務している。意に沿う仕事ではなかったが、海沿いの小さな小学校での平和な生活は、失業で暗澹とした日々を過ごしていた彼の心を癒してくれた。その小学校で、何かと親切にしてくれた男まさりの女性が、山田梅子であった。

雇用期限がまもなく切れる第一学期の終わる頃、日記の中に次のような記述がある。

もうあと二週間ばかり。それでこの仕合わせは結末となる。山田さんよ、月給よ、碁よ、みんなさらばだ。(中略)

僕は今かう思ふ。僕の家から通へる程のところに中等教員のくちがある。そこで七、八〇円くれる。生活は安定する。で山田さんを迎へる。又、八〇円もくれるところでなくてもよい。半商でとつてくれるなら四五円でもいい。それでも山田さんは喜んで来てくれるであらう。さうすれば当分のうち山田さんは今のまゝ河和へ通つてればよい。二人の月給を合せれば八〇円になる。何といふ楽しいことだらう。

だがみんな夢だ。夢のそのまた夢だ。

(「昭和一二年ノートⅢ及び昭和一三年Ⅰ」一九三七・七・五　傍線・括弧内引用者『校定新美南吉全集』⑪P・二七三)

どれほど本気なのかは疑わしいが、山田梅子を嫁として迎えて、つましくも、幸福な結婚生活を願望している。病弱な肉体と失意の中にあって、経済力の安定と平凡ながらも幸せな家庭生活は、あこがれとして渇望されたであろうか。この頃の二人は、平和な職場で互いに好意を寄せ合っていた段階だと言えようか。

それにしても、「夢のそのまた夢」とは、どういうことなのだろうか。山田梅子との結婚(もしくは他の女性との結婚一般)の実現を悲観視してのことだろうか。それとも高学歴を生かし地元で社会的・経済的に安定した教職に就くことが困難だとしているのだろうか。あるいは又、両方を同時に実現させることの困難さを述べているのだろうか。というのは、山田梅子(その後の、他の女性の場合でも)との恋愛関係の深まりという意味では、両者の間は、その後に急速に進展していって、そのままいけば結婚を考えなければならないところまで展開していくからである。さらには、就職問題に関しても、翌年の三月頃には、ここに書いてあるような願望どおりの職業(愛知県立安城高等女学校)に就職できることが確定的となるからである。そうして、四月からは正規の教員として出勤している。とすれば、いずれの条件についても、彼が述べるような「夢のそのまた夢」などではなくなっていくからである。だのに、結果的に見ると、梅子との恋愛ではその後にブレーキがかかっていき、やがて終止符が打たれ、結婚の実現は「夢」に終わっている。南吉の側の一方的な理由によるものである。

夏休みをはさんで、九月になると、南吉は次のような書簡を山田梅子宛に出している。

昨夜はおじゃましました。あれは浪費ではありません　つくづく嬉しかつた　あれでいゝのです　何だかよく覚えてゐないがくだくだといぢめあつてゐた　ああいふいざこざこそお互ひが愛し合つてゐる証拠みたいなものだと思ふ　だからあれは一種の恋歌です。

(中略)

われわれは出来たら結婚しよう。たとひ不幸に終らうとも、こゝまで来た以上さうするより他ないのです。結婚してからも出来るだけ愛しあつて

いかう。僕はぐうたらな夫になるだらうけれど、それでも且つ愛してください。

（一九三七・九・二三　封書　傍線・括弧内引用者　『校定新美南吉全集』⑫P．四四九）

南吉は、母屋から離れて独り住んでいた梅子の部屋を「昨夜」訪ねている。「ここまで来た以上さうするより他ない」と書いてあるから、二人の関係は決定的なところまで進んでいると考えてよいだろうか。故に、翌日のこの手紙では、「われわれは出来たら結婚しよう。たとひ不幸に終らうとも」「結婚してからも出来るだけ愛しあつていかう」などと書かれている。河和小学校での臨時教員を辞めてからこの夜の訪問に至るまで、両者間では手紙のやり取りが恋愛進行の中心的な役割を果たしたように思われる。南吉の長文の恋文が五～六通残っている。南吉にとっては、恋文の力で相手の心を掻き立てることは、それほど難しいことではなさそうに思われる。

それにしても、この書簡中にも、「われわれは出来たら結婚しよう。たとひ不幸に終らうとも」（傍線引用者）というように、「不幸」の言葉が見られる。M子との恋愛のときも、この言葉のために結婚へと進むことはなかったが、南吉にとって「結婚」＝「不幸」の図式は、相手の女性によって変化するというようないわゆる口実にすぎないものではなさそうである。この「不幸」が何を指すものか、梅子に理解できていただろうか。確かに、よく読むと「われわれは出来たら結婚しよう」（傍線引用者）であり、決して強い意志の表明にはなっていない。むしろ、消極的と言える。また、「結婚してからも出来るだけ愛しあっていかう」（傍線引用者）という文も、読み方によっては、〈愛し、愛される〉関係に自信を持てずにいるように思えないではない。

いずれにしても、南吉が梅子との結婚生活を本心から強く望んでいたならば、もはや実現はその寸前のところまできていたといえる。ところが、その夜の訪問の頃をピークにして、その後はますます執着する梅子の恋心とは逆行するように、南吉の側は一歩引けた感じの冷静さを保つようになり、心の中に変化が生じてきている。一一月には、次のような書簡を送っている。梅子からの手紙に対する返書だと思われる、

河和には自ら河和の日が照らうものをさう思つて便り差しひかへてゐた
また懐疑に落ちた　人と人との間の美しきもの一切を信ずることが出来ぬ。
（中略）
逢ふも空しからずや　相去りて日は永ければわれら相逢ふもともにともにかたることあるべしや

（封書　一九三七・一一・八　傍線・括弧内引用者　『校定新美南吉全集』⑫P．四五〇）

ここに見るように、南吉は梅子へ手紙を書くことを「差しひかえ」ていたことが知られる。（恐らく当初は、南吉の方が手紙を書くことでは積極的だったはずである。）また、恋愛への懐疑と、梅子と会うことは「空し」く、「かたることあるべしや」と述べている。交際を続けていくことに、距離を置こうとしていることがはっきりとうかがえる書簡である。

一二月になると、日記中に次のような記述が出てくる。

今山田さんは少しも魅力を与へない。あんな人にたとひしばらくの間でも、また全精神を以てではなかつたにしても恋を感じたのが不思議な位だ

（「昭和一二年ノートⅡ及び昭和一三年Ⅰ」　一九三七・一二・一九　『校定新美南吉全集』⑪P．二八八ペ）

南吉の日記は、日、刻、の感情のままに、しかもその感情を誇張するよ

うにして記述されているので、時により極端に矛盾した振幅をみせることは、少しも珍しいことではない。だが、こうした記述をみると、明らかに南吉の側に変心を感じさせる。南吉は、何を恐れているのだろうか。何が、梅子との恋愛心理に水を差して冷却させているのだろうか。本当に、梅子に対する魅力が減じてしまったためであろうか。

そうして、とうとう翌年の四月一日付け消印の書簡では、訣別の意志をはっきりと伝えている。県立安城高等女学校の勤務は、この日から始まっている。

家にて縁談起り我が儘一切容れられず
過去の女性関係みな泥を吐かされ
謝罪つて来いとたゝかれお伺ひしたのでした。
何とも不甲斐ないことながら父母頑迷せんすべもありません
何卒御海容下されたし
友人としてならば許すとのことなれば折りあるまでハさうして頂きたく
例の覚書一応御返却下さるまじくや云はでものことつい漏らし候ため潔
白のあかしに恋文のごとき一切頂いて来いと実に強硬にて何とも致しか
たないのです
本日頂きましたお手紙も両親の目前にて開封を強いられろくろく読まざ
るに取り上げられ候
家庭内の相剋尋常ならずみなヒステリイのごとき状態にて何も話しても
きゝわけなく候
何卒何卒ご了承御海容下され例の覚書早速御送付相成度伏而願上候
父母の眼盗んでの乱筆にて
（封書　一九三八・四・一　傍線引用者　『校定新美南吉全集』⑫P・四五一）

「家にて縁談起り」以下、上に書かれてあることは、大方が虚偽である。社会的・経済的に安定した、高等女学校の正規教員としての勤務はこの日から始まっている。まるで、それまでの、失業期や、不本意な小学校臨時教員、屈辱の杉治商会畜産研究所勤務といった過去を清算し、踏ん切りをつけようとしているかのような書簡である。しかし、それだけに梅子に対しては残酷な内容の書簡になっている。彼女が受けた精神的傷痕は軽微ではなかったものと推測される。事実、山田梅子は勤務している小学校を一年後には退職している。

ここでも、M子のときと同様に、白々しい嘘で固めた書簡を送ることでそれまでの恋愛関係に終止符を打っている。言うまでもなく、虚偽の書簡の主要な目的は、梅子の恋慕を断ち切ることにある。結婚が前提とならない限り、二人の間ではそれ以上の交際を継続することは不可能だったからである。その意味では、完璧なまでに効果的な書簡ではある。

南吉が恐れていたのは、結婚という〈他者との結びつき〉ではなかったかと推測される。南吉は、空想の中では美しい恋愛や結婚生活を思い描くが、現実世界の中では全くといってよいほどに無力であり実行できないことを、本人自身がまさに「冷却した」「魂」の部分で知悉していたと思われる。[1] 南吉の場合は、〈他者との結びつき〉において前向きに実現化させていく能力という意味では、空想世界とかけ離れすぎている。そうしたアンバランスは彼の少年時代からのものであった。それ故に、南吉にとっては実現性の能力が問われる局面になると、「自分が情けなく又憐れに感ぜられ」るのである。

（三）中山ちゑとの恋愛

中山ちゑは、南吉の生家の北隣りに住む中山家の四女である。南吉とは、学年は異なるが同年の生まれであり、幼いころから親しく遊んでいる。ちゑは、やがて愛知県立知多高等女学校を卒業し、東京女子医専へと進む。

その後、南吉が県立安城高等女学校に職を得た頃、ちゑは女子医専を卒業して刈谷にある竹内産婦人科医師として自分の家から通勤していた。ちゑは、性格的には男を男と思わないような気性で、「女なんて感じは、全然ない」というような女性であった。[2]

二人の恋愛が深まっていくのは、南吉の安城高等女学校勤務がほぼ内定していた三月頃からである。就職にあたっては、半田中学校時代の師であり、当時安城高女の校長をしていた佐治克己の奔走があった。三月一三日の日記に、次のような記述がある。

> 僕等は毎日あつてゐる。恋愛であるやうでもあるし、ないやうでもある。公然とあつてゐて人が何も云はないところを見ると僕等の態度は何も暗示してゐないらしい。僕達もまたそれをのぞんでゐる。（中略）だがあまりよくお互いを知り合つてをり、何でもかんでも喋舌りあつてゐた仲だから、今更あらたまつてきり出すのはテレ臭い。（中略）
> 僕は彼女がちつともいやぢやない。親切だし、キレイだし、教養があるし、いいことばかりだ。（中略）
> 僕等は今夜つまらぬ用にかこつけて半田まで歩いていつた。（中略）農学校の横の土手で腰を下して休んだ。腰を下すと急にあたりが静かになつたので危険になつて来た。どこか遠くでかそかに蛙が鳴いてゐるらしいのをきゝつけて僕が、あゝ蛙、といつて話をそつちに持つていつてごまかした。河鹿の話になり、温泉の話になり、青森の――虫温泉へ僕をつれていきたいと彼女が云つた。これは正しく求愛の言葉だから、ここで僕がもう一歩進めば忽ち落ちてしまふのだなと思つて又身をかはした。しかしこれでは卑怯かも知れないと又思つた。
> （「昭和一二年ノートⅡ及び昭和一三年Ⅰ」　一九三八・三・一三　傍線・括弧内引用者　『校定新美南吉全集』⑪P．三〇八）

この日記が書かれている三月と言えば、南吉が山田梅子との交際に訣別の意志を固めていた頃である。その頃に、中山ちゑとの新たな恋愛が進行していくことになる。勘ぐれば、社会的・経済的に安定した高等女学校教員の職が決まり、相応しい結婚相手として中山ちゑのことが浮かび上がってきたという推測が成り立たない訳ではない。しかし、そうした考えは必ずしも当たっていないようである。

傍線部に見られるように、恋愛は進行しつつあるが、男女関係に深まっていくことに対しては、南吉の側で強い警戒心を抱いており、避けようとしている。

二日後の、三月一五日の日記には次のようなことが書かれている。

> 昨夜もわれわれは半田へいつた。その前夜眠りが足りなかつたので気がすゝまなかつたがいやだとは云へなかつた。（中略）
> 九時頃かゞしをひきあげて又農学校の横を歩いて来た。前夜と同じやうな調子の話が続いた。が途中で話がトリツペリの上に落ち、chastityに移り、遂々余が既にそれを失つてゐることを語らねばならぬ羽目になつてしまつた。大したショックは与へなかつた。反つてそのために余に対する興味が増したやうだつた。
> 秘密をうちあけ合ふことは二人の男女にとつて非常に危険である、と自分は思つた。何故ならそれは相手を互に信頼しあふことで、信頼しあふことが恋愛の第一歩だからである。
> （「昭和一二年ノートⅡ及び昭和一三年Ⅰ」　一九九八・三・一五　傍線・括弧内引用者　『校定新美南吉全集』⑪P．三一一）

傍線部に注目したい。「秘密をうちあけ合」って「互いに信頼しあふ」ことから開始される恋愛を、南吉は避けようとしている。「信頼しあふ」ことを避けて進行する〈恋愛〉などというものが存在するのだろうか。し

かし、実際にはこのあと〈恋愛〉は進行していく。ここに、南吉の〈恋愛〉の真実がかいま見えてくるようである。南吉には、結局恋愛ができない（というよりも、〈恋愛の成就〉はあり得ないというべきか）。空想が原動力になって、ある一定のところまでは進むが、もともと「秘密をうちあけ合」い「互いに信頼しあふ」ことはできないから、いずれの場合でも破局が訪れる。南吉自身が、信頼の深まり（その結果として、結婚へと発展していくこと）を恐れ、ブレーキを踏むようになるからである。それは、換言すれば深く〈他者と結びつく〉ことに対する恐怖心であり、踏み込んでいく自信が持てないためだと思われる。

この点については、結婚ということであるので、肉体的虚弱という側面も考えられないわけではない。だが、むしろ、それ以前の問題として、精神的交わりとしての共同生活に対して全く自信が抱けないのだと思われる。例を挙げれば、「ごん狐」の作品世界でもそうであるが、人間と狐という壁が設けられている状態が、南吉にとっては自然な交流の形であり、平衡心を保てるというか、いわば常態であり、その壁が取り払われる時、死というか、破局が生まれてくる。要するに、南吉の場合では、相互の魂の流通共鳴ということは考えられないことのようである。自分自身の存在自体が、危うく感じられてくるという深刻な心理に陥るからである。従って、相手を信頼するということは、相手が自分の中へ入り込んでくることになるので、自分自身の存立が危機に瀕するから峻拒せざるをえない、そういった心理的構造ではないかと推定したい。

こうしたことは、「ごん狐」に限ったことではない。拙稿「失われた愛を求めて（一）――南吉の〈闇〉――」で考察したように、自身の幼少年時代を描いた三作品に共通することとして、そこに登場する少年たちは、他者との魂の流通共鳴に対して深い疑念や諦念を骨の髄まで味わい尽くしている。しかも、そうした疑念や諦念の淵源を辿れば、〈母の喪失〉感と密接に関連しており、四～五歳時の自分の「家」に起源があったことは、既に見てきたとおりである。またそれは、作品中だけに限らない。生前の南吉自身が、（友人河合の著書や親友の畑中の証言にみられたように）むしろ自分の方から頑強な壁を設けて、自らのことを一切語ろうとはしないのであった。南吉はこのように、空想の中では願望し、また焦がれる恋愛や結婚でさえ、現実場面になるとどうにもならない壁が立ちふさがって、一歩を踏み出すことができないでいる。南吉の深い〈闇〉は、このように男女の〈結びつき〉においても見られる。[3]

やがて、中山ちゑとの恋愛は、男女の一線を越えそのまま交際を続行すれば結婚問題が現実化するところまで進行していく。しかし、この場合も、梅子の時と同様に、南吉の側がブレーキをかけ、距離が置かれるようになっていった。約一年後の日記に、興味深い、次のような記述がある。

乙川で若い洋装の女が乗つた。一目見て堀田の妹で東京女子医専を出たのだなと思つた。（中略）

態度に素直な落ち着きがあり、たえず微笑してゐた。知的な美しさがただよつてゐた。この女は幸福を享楽する資格を十分持つてゐるという気がされた。彼女を見た最初の瞬間から同じ学校を出たちいこが私の頭に浮かんでゐた。どこか二人は似てゐた。しかしそのちいこはもはや私の妻にならねばならないといふ不幸を約束されてゐる。私と結婚すれば物質的にも精神的にも楽しい生活は、不可能なのだから。さう思つてちいこが可哀さうだつた。自分自身が憎らしかつた。

（「昭和一四年ノート」一九三九・一・一四　傍線・括弧内引用者　『校定新美南吉全集』⑪　五三九ペ）

「ちいこ」というのは、中山ちゑのことである。同じ医専を卒業した車中の女性と、自分の恋人であるちゑとを比較して、その差異にちゑのことを哀れんでいる。その差異とは、ちゑが「不幸を約束されてゐる」という

ことである。南吉の妻になることがどうして「不幸」なのだろうか。なぜ、そのような捉え方をするのだろうか、この点は極めて重要である。

「不幸」の理由として、「物質的にも精神的にも楽しい生活は不可能」、を挙げている。このことを、どのように考えればよいのだろう。理由としての妥当性はどうなのか。南吉自身は高等女学校の教員であり、ちゑは医師である。それが、どうして物質的に「楽しい生活は不可能」、なのだろう。次に、「精神的」とは。この点も、よく分りにくい。相互の愛情という点でいえば、その頃のちゑは、南吉との結婚を強く望んでいるからである。考えられることは、結核による若死である。しかし、その点のことは、南吉のために薬を与えたりしているから、ちゑはかなりのことを承知の上ではなかっただろうか。南吉一人が、肺結核に関し若死した場合の責任のようなことをうじうじと感じていると考えられなくもない。が、ここで「精神的」にというとき想起されるのが、M子と恋愛をしている時のことである。

南吉は、M子との結婚について「僕は世間一般の男と違ふ。肉体が虚弱である、精神が冷却してゐる。」「だから僕と結婚したらあなたは不幸だ。」（傍線引用者）と述べた。その頃は、まだ、第一回目の喀血も経験していなかった。その時の「精神の冷却」というのは、「魂は芯まで冷えて」「温かい着物が脱落していく」といった、〈他者との結びつき〉の際に起きてくる、どうにもできない、言うなれば存在自体を耐えがたくさせるような「寂しさ」の心理であった。南吉は、そうした心理から、この場合の中山ちゑとの恋愛・結婚でも一歩を踏み出せていないように思われる。M子との恋愛では、結婚に踏み込めない理由を、「心の複雑」を根拠として述べ、だが「心の底ではたつた一つのこと、それが言えないために自分は理屈めいた愚痴を言つてゐる」とし、「非常に自分が情けなく又哀れに感ぜられた。」と、日記に書いた。ちゑとの場合でも、同様の構図になっているのではないだろうか。恐らく、この場合でも「不幸」の理由の一番深いところについては語られていないように思われる。M子とのとき、「非常に自分が情けなく又哀れに感ぜられた」とあるように、ここでは「自分自身が憎らしかつた。」と述べているが、それは、全く同じ根から出てきている言葉ではないかと思われる。「同じ根」とは、南吉の〈不幸者意識〉のことである。

この〈不幸者意識〉については、少し詳論してみたい。次のような日記の記述も、関連的な内容であり、南吉の〈不幸者意識〉の表れとみられる。上記の日記の三日後の記述である。

夜とまり。小母さんと結婚のことを話してゐるとき、忽然と、自分はどんな女でも幸福にすることは出来ないから自分相応のつまらない女をめとらうと今まで考えてゐたその考への馬鹿げてゐることに気付いた。どんないい女でも選んでいいのだ。神様はそんなことは文句はいはないのだ。またいい女ならこんなつまらぬ男といつしょになつたことを文句いいはしないのだ。

（「昭和一五年ノート」一九四〇・一・一七　傍線引用者　『校定新美南吉全集』⑫P．一五四）

自分自身のことを、〈不幸に生まれついている〉とする〈不幸者意識〉は、生涯を通して南吉から離れることのなかった感じ方である。南吉文学は、その重苦しい意識から逃れ、開放されるための空想の所産であったとさえ言える。

自我が肥大していく中学生時代において、その日記には、至るところに運命や神を恨む記述が溢れている。自分のことを〈不幸に生まれついている〉という意識は、必ずしも、肺結核による若死との関連を意味している訳ではない。その頃には、肺結核の明白な病状としての喀血等の兆候はまだ表れていないからである。むしろ、〈不幸者意識〉が次第に強まってい

く中で、家系や自分の体躯から将来について悲観的に考えるようになり、肺結核で夭死するという運命を予感するようになった、と言えようか。〈自分は不幸に生まれついている〉、だから自分の母や、母方の叔父さんと同様に三〇歳ぐらいで夭死する、という感じ方である。

こうした南吉の〈不幸者意識〉の内実こそ、まさに本論文で追求しているところの、〈闇〉と係わりを持っている。「心の底」からの声として、彼自身の〈不幸者意識〉を最も強く表明しているとき、その文章には、しばしば「運命」とか「神様」という言葉が含まれる。それは、〈母の喪失〉ということを意味している。幼い子どもにとって、世界最大の不幸は〈母の喪失〉である、と南吉は捉えている。その「運命」を、こともあろうに自分が背負わなければならないように「神様」がお決めになったために、現在までの不幸が生じてきている、とする受け止め方である。どうしてそのような受け止め方になるのかと言うと、南吉が「魂」の底で〈母の喪失〉を淵源として生じている、耐えがたい現実の〈闇〉を感じているからである。その耐えがたい最大の〈闇〉が、〈他者との結びつき〉に他ならない。すなわち、少年時代のころより骨の髄まで味わってきたところの、〈他者との結びつき〉を得ることができない〈孤独地獄〉である。相手を信頼しよう（〈結びつき〉を得よう）と試みて陥った「寂しさ」の心理は、彼の場合地獄となった。彼にとっては、無限に続く耐えがたい（地獄の）中で生きてきた、という感じ方が肌身についてしまっている。そうした過程のなかで、もはや中学時代の頃になると、自分が裸になって、相手を信頼して〈結びつき〉を得ようとすること自体を諦めつつあったと思われる。それよりも、〈結びつき〉を要しない空想世界で〈夢〉を広げて生きることの方に、はるかに大きな自由と深い喜びを覚え、身につけていった、と思われる。

この点に関し、多くの人の場合では自我の発達とともに思春期に彼我の問題で一種の危機が訪れる。しかし、そのときは人間関係を築いていく上での一定の力強さの土台みたいなものは一応できている、とみてよい。

しかしながら、南吉の場合は幼少期の〈他者との結びつき〉において深刻な危機に見舞われてしまった。本来ならば、スムーズに乗り越えられていなければならないはずのものである。すなわち、その時点で〈他者との結びつき〉の心理において障害が生じてしまっている。そのために以後、多くの少年にとっては苦もなく得られる友人たちとの〈他者との結びつき〉が、南吉の場合は困難となっていく。そうして、その困難さを抱えたまま、というよりはその困難さに敗北した形で思春期に突入していっている。そうした少年（南吉）にとって、人生の勝利を得るのは空想世界においてであり、空想の飛翔を武器として自我が拡大していったといえる。それが、南吉文学（童話）である。

そうした作者の場合、その主なるテーマは必然的に彼にとって切実な問題であり、充足されることなく空白のままできた、幼少年時代の他者（母）との〈結びつき〉となる。すなわち、最大の空白・飢餓のままできているところの〈失われた母の愛〉を淵源とする〈他者との結びつき〉に他ならない。

五　終わりに

南吉は継母と一緒に住まう家で、今は亡き〈実母の愛〉を切実に求めつづけた。そのことが、〈他者との結びつき〉（「魂の流通共鳴」）の心理において深刻な心理障害を生じさせることとなり、それを引きずり、生きていくことになった。

小稿では、南吉の少年時代からの〈孤独〉の〈闇〉は、青年時代の恋愛関係においても濃い影を投じていることを論及した。南吉にとっての恋愛は、なぜ成就し、結婚の方向へと進展していくことがなかったのか。それは、南吉の恋愛や結婚はあくまでも空想上の産物にすぎず、実現のために〈他

者との結びつき〉を深める実行段階になるとまるで幼児の如く無力であったこと、しかもそのことを誰よりも彼自身が知悉していたことを、述べた。南吉は、青年時代の花実である恋愛に関しても「自分が情けなく又哀れ」であり、「自分自身が憎らし」く感じられる〈不幸者意識〉に囚われるのであった。

南吉は、〈失われた母の愛〉を童話の中に求めて、〈夢〉として描き出すことで、不朽の名声を獲得した。しかし、その現実生活は栄光とはかけはなれた、傷心の〈孤独〉の〈闇〉の中を歩いていた。

〈注〉

① 神谷幸之『南吉おぼえ書　第二集』（昭五六・二・四　南吉の家運営委員会）によれば、生前の山田梅子のことをよく知っている近所の人の証言では、山田梅子に関しては、「性格がぱあ、としたね。どっちかというと、男まさり」「恋愛するなんて、そういうことは、ちょっと、考えれん」ような男まさりの性格であり、南吉に関しては「あんな、ヒョロ、ヒョロの、コツコツに、梅子先生が、ほれるわけがない」等（P．六四～六五）と述べている。要するに、周囲の人から見て南吉と梅子とのことは想像しがたい恋愛関係であるとして映っている。（極端に内向的な南吉の性格については、注③を参照）

② 神谷幸之『南吉おぼえ書　第二集』によれば、中山ちゑの妹である中山なつは、（南吉とちゑが、芝居やテレビの中で恋人であったことに対して）「その位ね。姉に本当、女らしいとこがあったら、私たちも嬉しい。本当の話が。」「男を男と思うような、気性の持ち主では、なかったから、私の姉は。」「一寸、きっぷがね。はずかしい話ですけど、女としてはね。まあ、ゼロですね。女なんて感じは、全然なかったんですね」（P．一四二～一四三）等と証言している。

③ 南吉と中山ちゑの交際に関して、南吉という人間像についての印象や内向的に育った原因をちゑの妹である中山なつは、「おかしな印象ですけども、正八ちゃんは、正面向かって、話をせなんだ。」「絶対、正面向かって、話せん。」「（話をするときは）横向いとるの。こう。」「私は、家庭環境だと思うの。」「それに、ままま母でしょう。それにしっかりしたお母さんだからね。それにお父さんが、正八っあんと、お母さんのなかへ入って、もう少し、話のできる人ならいいけど。」「あのとおり、もの言わん人でしょう。だで、正八っあんも、自然、内向的に育っていったでないかしら。」等と述べている。（神谷幸之『南吉おぼえ書　第二集』P．一二五～一二八）

平成十年（一九九八）年　九月一八日受理
平成十年（一九九八）年一二月二五日発行